vinetur

# ブルゴーニュ、フォンテーヌに耐病性ブドウの候補8品種を植栽

シャルドネとピノ・ノワールを交配した候補品種を、味わい、耐久性、耐暑性の面から試験。導入は早くても2035年以降となる見通し

2026年11月9日（月）



ブルゴーニュでは、シャルドネとピノ・ノワールを交配して得られた実験用ブドウ8品種を、ソーヌ＝エ＝ロワール県フォンテーヌの新たな試験区に植えた。長年続く、地域のワインの個性を保ちながら、カビ性病害への抵抗性を高めたブドウを育種する取り組みが新たな段階に入った。

今回の植栽は、ブルゴーニュワイン委員会（BIVB）、シャンパーニュ委員会、フランス国立農業・食料・環境研究所のコルマール拠点、フランスブドウ・ワイン研究所が主導する共同プログラム「CEPInnov」の一環だ。このプロジェクトでは、ブルゴーニュを代表するブドウと、天然の耐性を持つ品種を交配する。遺伝子組み換え生物やゲノム編集は使用していない。

フォンテーヌに植えられた最初の候補8品種は、シャルドネ系の白ブドウ3品種と、ピノ・ノワール系の赤ブドウ5品種で構成される。繰り返しの防除を必要とし、コストを大きく押し上げる可能性があるベと病とうどんこ病への耐性を基準に選抜された。Vitisphereによると、8品種はいずれも、2つの病害それぞれに対する耐性遺伝子を2つずつ持つ。耐性をより長く維持することを狙った手法だ。

フォンテーヌの新たな区画は17アール（約0.42エーカー）で、9月25日に開設された。各候補品種につき、およそ100本のブドウ樹が植えられている。BIVBは、今後ここで約40品種を評価する見込みだ。

現在研究中の8品種は、より大規模な選抜過程を経て残った最初の候補だ。交配は2015年に始まり、約1万6000粒の種子が得られた。初期選抜を経て、2018年からブルゴーニュのコート・シャロネーズにも位置するアルーズに約350品種が植えられ、各候補につき5本が試験された。そこでの試験を通じて候補が絞られ、最初のグループがフォンテーヌに移された。最終的に約40品種がフォンテーヌの試験区に進むとすれば、当初の種子約400粒に1粒だけがこの段階に到達する計算となる。

研究者らによると、ブルゴーニュでは病害への耐性だけでは不十分で、新しいブドウがブルゴーニュらしさを感じさせるワインを生み出せるかどうかが中心的な課題だ。候補品種はすでにごく少量で醸造され、標準的なシャルドネやピノ・ノワールと飲み比べられている。BIVBでプロジェクトマネージャー兼植物材料専門家を務めるマリオン・ヴィマー氏はVitisphereに対し、ブラインドテイスティングでは対照ワインを見分けるのが難しいことがよくあったと語った。

初期の少量醸造では、品種ごとにわずか5〜10キログラムのブドウを使用した。フォンテーヌでの大規模な植栽は、こうした状況を変えることを目的としている。候補品種ごとに約100本を植えたことで、品種ごとに少なくとも80キログラムのブドウを収穫できると見込まれ、より本格的な醸造と、信頼性の高い統計分析が可能になる。ヴィマー氏によると、規模を拡大した試験では水分ストレスへの感受性も調べられる。

この課題は2026年に一段と切迫している。フランスの統計機関Agresteは11月1日、ブルゴーニュ・ボジョレー地域のワイン生産量が2025年比で22％減少したと推計した。特にピノ・ノワールは干ばつと高温の影響を強く受けた。次世代のブドウ樹は、病害抵抗性や味わいだけでなく、より高温で乾燥した環境にどう対応できるかという点からも評価されている。

フォンテーヌの試験区は、品種を公式カタログに登録する前に必要となる、フランスの規制当局がVATEと呼ぶ評価にも対応するよう設計されている。これは農業的・技術的・環境的価値の評価だ。品種登録までには長い時間がかかる。若木が実をつけるまでに約3年、その後さらに3年間の観察が必要となる。Vitisphereは、手続きが順調に進めば2032年にカタログ登録を申請できる可能性があると報じた。一方、BIVBはより慎重な見通しを示し、品種が利用可能になるのは2035年以降としている。

候補品種がこうした関門を通過したとしても、ブルゴーニュのアペラシオンでシャルドネやピノ・ノワールに取って代わることはない。現行規則では、関心品種の適応枠組みのもと、補助品種としてのみ使用でき、試験導入を選択したアペラシオンに限られる。ブレンドに占める割合は10％を上限とする。

この制限には、ブルゴーニュが目指すバランスが表れている。プロジェクトの目的は地域のワインを作り変えることではなく、世界的に知られるワイン産地の個性を保ちつつ、殺菌剤散布への依存を減らす現実的な方法を見つけることだ。より広い飲料業界にとっても、耐病性品種の育種によって、プレミアムワインの価値を支える個性を損なわずに防除の必要性とコストを削減できると示されれば、その意義はブルゴーニュを超えて広がる可能性がある。

シャンパーニュも、マルヌ県シュイイの実験農場プルメコで独自の評価区を設け、同じ取り組みを自らのブドウを使って進めている。フランスのワイン産地が、市場を支えるブドウの個性を手放すことなく、病害圧力や気候ストレスに適応する方法を模索するなか、ブルゴーニュとシャンパーニュのプログラムは並行して進んでいる。